青春を取り戻すには

このところフランスの小説を読んでいない。フランス文学はどうなっているのだろうか。神奈川のはずれに住んで、ぼんやりと暮らしているので色々な点で刺激がないというのも確かだが、図書館にいっても最近のフランスのめぼしい本は見当たらないような気がする。大学の講義を受けたら少しは現代の文学の形態もわかるかもしれない。

私の学生時代の、昭和三十年代初めのころは、まさにフランス文学全盛であった。十九世紀の自然主義やロマン主義、象徴主義も健在で、バルザックやゾラ、スタンダール、モウパッサン、フローベルなど膨大な小説が綺羅星のごとくに輝いていて読みこなすのが大変であった。さらにプルーストなど二十世紀の大河小説、ロブグリエ、ビュトールを筆頭にヌーボーロマンなる前衛小説も台頭し、世界文学の主流を占めていたように思う。哲学者であり、作家であり、劇作家でもあるサルトルの「実存主義」が学生の間でも流行になっていた。「神は死んだ」というフレーズが一人歩きをし、よく理解をしているわけでもないのに喫茶店に長時間たむろして、「唯物論」を云々した。

まさに生意気盛りの学生時代であった。

高校時代、大学に行くなら「仏文科」と思ったのは確たる信念があったわけではない。地方の田舎の県立高校だったので、フランス語など触れたこともなかった。ただ高校三年の時、担任でもあった国語の先生が「文学をやるんだったらなんといっても、フランス文学だよ、国文なんて、狭い視野にかかわっていないで、世界に冠たるフランス文学を勉強するべきだ、いまや世界の文学はフランスがリードしているのだからね」というアジテーションに背中を押され、モーリヤックとモウパッサン、ユーゴしか読んだことのない自分の無知に目をつぶり、仏文科を希望したのである。

さらにいえば、映画も戦前、戦後を通じてフランス映画全盛の時代であった。イタリアのネオ・リアリズムと拮抗していた。「天井桟敷の人々」（マルセル・カルネ監督）など何度見たことか。シャンソンも大流行で、イブ・モンタンの「枯葉」、ダミアの「暗い日曜日」アダモの「雪が降る」など、日本語訳で数多く歌われた。ジュリエット・グレコは実存主義の歌手として黒いドレスをまとい、われわれ学生の憧れの的であった。私にとって学生時代はまさに青春を謳歌したかけがえのない時期であった。

それから五十数年、田舎暮らしと主婦としての倦怠しきった日々が流れ、私の周り

から文学の香りなど消えてしまって久しい。それでも時々、紀伊国屋など覗いては、コロンビアの作家ガルシア・マルケスの作品に喜びを見出したりしているのだが。アメリカはもちろん、最近は世界各国の作家がノーベル文学賞を授受していて特定の国が世界に先んじているとはいえない現状だとおもう。日本も世界の水準に劣らず、川端康成と大江健三郎がノーベル文学賞を受賞し、安倍公房や三島由紀夫、村上春樹は世界数十カ国に翻訳されて親しまれている。

現在、フランス文学はどうなったのか。「花の都」ともてはやされたパリ、輝かしい歴史と文化遺産を持つ栄光のフランスはどうなったのか。二〇〇八年、クレジオがノーベル文学賞を受けた。しかし難解で、私にとって読んで楽しめるというような作品ではない。ヌーボーロマンと呼ばれる小説手法が万人向きだとは到底思えないのである。四ヶ月ほど前に、久々にクラス会があって十四人が集まった。卒業以来始めて顔をあわせるといった仲間もいて名乗らないと誰なのか判断できないほど容貌が変化している男性もいた。その道を極めて、大学教授になった同級生も二人いるが、二人とも病気になって外出もママならない状態である。卒業して半世紀あまり、今更文学でもないし、話題は盛り上がらなかった。

「衰退しているんじゃないの」などと無責任なことを言う人もいる。思い出すことは卒論で苦労をしたこと、しかしなんといっても一緒に「遊んだ」懐かしい記憶のほうが鮮明で、もはや文学論に興じるような青臭い年ではないのであった。大学の学部も現在は「仏文科」ではなく、「フランス語学科」に変更になったらしい。「文学」は人気のない学科になったようだ。学生時代の不勉強を悔いて、次女に自分の果たせなかった「夢」を託そうとして、同じ大学の、同じ学部に入学させ、彼女も異論はなかった。パリにホームスティをしたり、語学はほどほどに学んだようだが、四十代を迎えた今、文学にはほとんど無関心で、心理学科に行けばよかったと後悔している有様だ。

しかし、八十代に近づいているのに、いまだに演劇に熱中して、毎年、小さなホールの舞台でモリエールの喜劇を演じ続けている先輩もいる。公演の案内をいただくのだが、それにはいつもオスカー・ワイルドの次のようなエピグラムが引用されている。

「青春を取り戻すには、過去の愚行を繰り返せばいい」。

（二〇一二年二月）